

平成 2 8 年 6 月 2 0 日現在

機関番号：4 2 6 4 8

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：2 6 8 8 5 1 2 2

研究課題名（和文）保育者の専門的力量形成に関する比較教育史研究

研究課題名（英文）The Comparative Historical Study of the Professional Development of the Kindergarten Teacher

研究代表者

永井 優美（Nagai, Yumi）

東京成徳短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：3 0 7 3 3 5 4 7

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、保育者の専門的力量形成について、比較教育史の視点から考察を行った。日本の幼児教育は常にアメリカの影響を受けて展開されてきた。そこで、1890年代から1930年代にかけてのアメリカの幼児教育情報によって、日本においていかなる保育者養成が行われたのかを、キリスト教系養成校および保育団体を中心に検討した。その結果、アメリカ人宣教師や日本人指導者たちは、総合的な力量を備えた、学び続ける専門職としての保育者を育成しようと試みていたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study attempted a comparative historical analysis on the professional development of the kindergarten teacher. In Japan, early childhood education developed from a consistent American influence. I investigated how Japanese kindergarten teachers were trained using American kindergartens as models from the 1890s to the 1930s, focusing on missionary training schools and the kindergarten organization. As a result, I found that American missionaries and Japanese leaders tried to train professionals who continued learning and were completely capable kindergarten teachers.

研究分野：教育史

キーワード：幼児教育史 保育者養成 進歩主義教育 アメリカ人宣教師 キリスト教系保育者養成校

1. 研究開始当初の背景

平成 27 年度にスタートした子ども・子育て支援新制度のもと、今後は保育者の質保証に関する議論が盛んになされていくことになるであろう。幼稚園教諭免許と保育士資格の一体化や保育教諭の実質化、またそれらに応じた保育者養成の在り方など課題は山積している。保育者にまつわる制度が改正されつつある今こそ、保育者の専門的力量形成に関する基礎研究が進められなければならない。

本研究は、比較教育史研究の手法を採り、アメリカの幼児教育情報がかつて日本にどのように導入されたのかを分析し、それに基づいて行われた幼児教育・保育者養成の実態と特質を考察することで、普遍的な保育者の専門性の内実を解明することを試みたものである。

日本の教育実践は、戦前から今日に至るまで、常に諸外国の教育情報を基に形成されてきた。そのため、日本の教育実践の実態を解明するには、国内の状況を検討するだけでは不十分であり、日本を取り巻く諸外国との影響関係を把握する必要がある。さらに、この視点を有することは、国際的な潮流の中で日本の幼児教育・保育者養成がどのように位置づけられてきたのかを明らかにすることにつながる。

戦前は養成レベルに大きな幅があり、見習制や検定試験などによって保育者となる者や無資格の保育者も多数存在した。戦前日本の保育者養成に関する実証的な研究は、佐野友恵による検定制度を中心とした一連の研究(『戦前日本における幼稚園保姆検定制度の確立』、『乳幼児教育学研究』第 12 号、2003 年など)以外ほとんどなく、特に養成校における養成の実態と特質を明らかにしたものは少ない(なお、「保姆」とは保育者の歴史的呼称である)。

幼保一元化政策が進められつつある今日、制度や施設の共有よりも重要なのは、保育職に従事するための資格や養成内容の一元化であり、その総体としての保育者養成の内容的向上であると言える。そこで、これまで日本においてどのように保育者が養成されてきたのか、また、養成がうまくいかなかったのはなぜかを検証をすることを通して、今まさに進められようとしている保育者養成改革の指針を提供したい。

2. 研究の目的

戦前日本においては、国家による保育者養成政策不振の状況の中、キリスト教系養成校が専門職としての保育者の養成に多大な貢献を行った。本研究では、これまで看過されてきたキリスト教系保育者養成校に焦点をあて、保育者の専門的力量形成の実態を明らかにすることを目的とした。キリスト教系保育者養成はアメリカ人宣教師やその影響を受けた日本人指導者、またアメリカに幼児教

育留学を果たした日本人指導者によって担われていた。これらの人物の養成思想やそれに基づく養成方法を検討することを通して、いかなる資質能力や力量を有した保育者が輩出されたのか、以下の視点から考察した。

(1)アメリカ幼児教育・保育者養成史

戦前日本の幼児教育および保育者養成は、とりわけアメリカの影響を強く受けて発展してきた(『幼稚園教育百年史』(文部省、1979 年)などの通史参照)。しかし、そもそもアメリカ幼児教育・保育者養成史に関する研究は少ない。『アメリカの幼稚園運動』(阿部真美子他、明治図書出版、1988 年)などのいくつかの先行研究が存在するものの、未だそれは総体的にも個別事例においても十分に明らかにされていない状況である。そこで、戦前日本の幼児教育・保育者養成の特質を考察するためにも、特に 1890 年から 1930 年代のアメリカにおける幼児教育・保育者養成の動向を把握した。

(2)日本人指導者の果たした役割

幼児教育情報の伝達には、その仲介者の役割が重要になってくる。日本人指導者は情報をアメリカ人から直接的に受け取る存在であり、この段階での情報伝達の質が、その後の実践の在り方に大きな影響を与えることになる。そこで本研究においては、幼児教育情報の受容主体であり、幼児教育発展のキーパーソンとなった日本人指導者に注目し、幼児教育・保育者養成に果たした役割を検討した。

(3)保育者養成への多角的検証

幼児教育・保育者養成の普遍的課題を探るべく、昨今の保育界の動きから保育者に求められる資質能力や力量に関する調査を行った。また、保育実践に大きな影響を与えた進歩主義教育とはいかなるものであるかについて考察するため、大正新教育の実践家を取り上げ、進歩主義教育の理念や方法について考察した。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、比較教育史的手法を用いて、日本とアメリカの幼児教育・保育者養成に関する以下の検討を進めた。

(1)アメリカ幼児教育・保育者養成の動向の把握

(2)アメリカの幼児教育情報がいかに日本に伝えられたかを検証するための人物研究

(3)日本国内の幼児教育・保育者養成の動向の把握および日本独自の幼児教育・保育者養成の特質の解明

4. 研究成果

上記の研究方法に基づいて、本研究では次のような調査を実施し、研究目的を達成した。

(1) アメリカ幼児教育・保育者養成の動向と日本人指導者の留学経験に関する調査

教育関係資料を収集しているハーバード大学ガトマン図書館および同図書館内にあるスペシャルコレクションにおいて、1890年から1930年におけるアメリカの幼児教育・保育者養成の実態調査を行った。その結果、当時のボストン周辺での無償幼稚園設立の動き、また、それに携わった人物についての史料を収集することができた。さらに、幼児教育留学を果たした甲賀ふじに関する調査も行い、彼女がどのような保育者養成を受けたのか、その概要を把握することができた。

シカゴ大学レゲンスタイン図書館スペシャルコレクション研究センターにおいて、シカゴ大学教育学部および実験学校の史料を収集した。それによって、シカゴ大学の保育者養成課程の特徴や甲賀ふじの留学時の学びの実相を検討することができた。また、同図書館には *Kindergarten Review* などの幼児教育雑誌が所蔵されている。同誌からアメリカ幼児教育・保育者養成の状況を把握するとともに、これは日本に輸入されていたため、いかなる幼児教育情報が日本にもたらされていたのかについても確認することができた。

(2) 国内のキリスト教系保育者養成に関する調査

聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センターには広島女学校附属幼稚園および保姆師範科(後のランバス女学院保育専修部)に関する史料が所蔵されている。これらを手がかりに、進歩主義保育で知られる同園の保育カリキュラム開発の実態を明らかにした。また、指導者であるクックの保姆養成論の特質を指摘した。

神戸女学院からは日本の保育界を主導する人物が輩出されている。特に、顕栄保姆伝習所の和久山きそや日本女子大学附属豊明幼稚園の甲賀ふじは著名である。彼女らに関して神戸女学院大学附属図書館において同窓会誌を閲覧し、人物研究を進めた。

成瀬記念館には日本女子大学附属豊明幼稚園に関する史料が所蔵されている。同園での甲賀ふじによる実践や研究の実態を明らかにし、甲賀の留学先での学びの成果を確認した。

1906(明治39)年に設立されたキリスト教系保育専門団体である日本幼稚園連盟(JKU)において、保育者の資質能力や専門性に関する

議論がなされていた。また、同団体は日本の保育者養成を啓蒙する役割を担っていたことを明らかにした。

以上の調査から、特に次の点を指摘することができた。

キリスト教系養成校や団体においては、保育者像の共有が図られ、保育者の質の向上が目指されていた。第一に、保育者は専門職であると認識することが重要であった。当時は保育者を子守りと見なすような世論があったため、保育者の専門性を追求するには、この前提を確認する必要があった。その上で、保育者には、保育の専門的知識や技術はもちろん、多様な分野にわたる教養や人格、目的意識など総合的な力量が求められた。その中でもとりわけ重視されたのは研究能力であった。思考力、調査能力、実験力、観察力の他、卒業後も保育現場で自ら保育を構想し、問題を解決していくためにも原理研究が重視された。さらには、保育者は常に諸外国における最新の教育情報を取得することや、特に指導者には直接海外において調査・研究を行うことが奨励された。

これらのことから、キリスト教系保育者養成においては、学び続ける専門職としての保育者像が共有され、保育者の専門性は広く人間性の上に築かれるものと捉えられていたことが明らかとなった。その他、保護者支援など、すでに戦前日本でも重要な保育者の力量の一つであると理解されていたものもあった。このように、本研究を通して、保育者の専門性に関する普遍的な課題を明確化することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

1. 福山多江子・永井優美「保育者養成における実習の意義(2) 学生にとってのPDCAサイクルの重要性に着目して」『東京成徳短期大学紀要』第49号、2016年3月、89-101頁。

2. 永井優美「明治期広島女学校附属幼稚園の保育カリキュラム開発 中心統合法の導入と展開を中心に」『カリキュラム研究』第24号、2015年3月、15-26頁(査読あり)。

3. 福山多江子・永井優美「保育者養成における実習の意義 実習の振り返りから見る学生の成長(その1)」『東京成徳短期大学紀要』第48号、2015年3月、55-70頁。

4. 永井優美・橋本美保・近藤めぐみ「樋口長市の生活教育論 生命思想の影響に着目して」『東京学芸大学紀要』総合教育科学

系 I、第 66 集、2015 年 2 月、67-78 頁。

5. 永井優美「日本幼稚園連盟(JKU)における保育者養成論 保育者の資質能力への共通理解の形成」『教育学研究年報』東京学芸大学教育学講座学校教育学分野・生涯教育学分野、第 33 号、2014 年 9 月、107-122 頁(査読あり)。

〔学会発表〕(計 3 件)

1. 永井優美「甲賀ふじのアメリカ留学と幼稚園教育実践」教育史学会第 59 回大会、於宮城教育大学、2015 年 9 月(口頭)。

2. 永井優美「M. M. クックの保姆養成論」日本保育学会第 68 回大会、於椋山学園大学 2015 年 5 月(口頭)。

3. 福山多江子・永井優美「学生の実習に対する意識と成果について」日本保育学会第 68 回大会、於椋山学園大学、2015 年 5 月(ポスター発表)。

〔図書〕(計 2 件)

1. 永井優美『近代日本保育者養成史の研究 キリスト教系保姆養成機関を中心に』風間書房、2016 年 2 月。

2. 永井優美「樋口長市の自学主義教育論」(第 8 章)橋本美保・田中智志編『大正新教育の思想 生命の躍動』東信堂、2015 年 7 月、256-277 頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

永井優美 (NAGAI YUMI)

東京成徳短期大学・幼児教育科・准教授

研究者番号：3 0 7 3 3 5 4 7